

ていると言えるのかもしれないが、一度、罪を犯して逮捕されれば世間とは千里の距離が生まれ永久にその差は縮まることはないのではないか。逮捕された犯罪者は先ず公権力による刑罰を受け、次いで出所後は世間一般による“刑罰”を受けることになるのではなかろうか。従って現在、刑務所で服役中の受刑者は刑罰全体から見ればまだ前半の部分を服役しているにすぎないの

だと言えるのかもしれない。

刑務所のあの高く厚い塀と監視塔は電車の窓からはっきり見える方がより教育的ではなかったかと思う。しかしまた刑務所の塀をあたかも庇うように立ち並んでいる人家と建物は受刑者との深い溝を少しでも埋めようとする思いやりのようにも感じられるのである。

講道館柔道、タイを往く——その3

村田直樹

アヤさん——。

この言葉を読者諸兄姉の先生方にご存知であろうか。タイへ行かれたことのある方なら初耳ではあるまい。

何と説明しようか。

子供をあやすところ^{うき}た名称では、と国際交流基金の人から聞いたことがある。なるほど、そうかも知れない。しかし、アヤさん、子供をあやすばかりで終日暮らす訳ではない。炊事、洗濯、掃除、買物、そして子供のお守等、日本の主婦の為る仕事の殆どをこなすタイ人女性である。

バンコク在住日本人、欧米人、その他外国人家庭に雇われて働く。住込みも通いも両方ある。年齢もまちまちで10代から始まって上は知らない。年齢がまちまちなら美醜もまちまち。美人も居れば醜女も居た。言葉はどうか。英語か日本語を話す。そういうアヤさんは給料が高い。多くはタイ語一辺倒である。

そのアヤさんにまつわる話を今回は記し

てみよう。メナムの風に乗って……。

バンコクの中央通り。それがスクンヴィット通りである。ダウンタウンに向かい動脈の如く走っている道。

その動脈には支脈もある。ソイと呼ばれる路がそれ。ソイには番号が付けられていて、スクンヴィットの両側を、片側は奇数、片側は偶数となっている。ソイの小路は道路を隔てて必ずしも対応していない。ソイ5の対面にソイ6はないのだ。

大動脈スクンヴィット通りには高級住宅が並び建つ。外国人居住者が多い通りということである。

スクンヴィット・ソイ47。私の止宿先はそのスクンヴィット通りであった。高い塀に囲まれ、入口には守衛が居、中に入れば広くゆったりした駐車場、その奥に芝が広がりヤシの木と、その木蔭にプールが在った。

私の契約した部屋は一階で、芝を隔てて

ブルに面し、ながめ最高。何故ならこのアパート、欧米人家族が幾組か居て、ヴィキニの金髪ギャル達が毎日の様にブルサイドで戯れるから。

部屋は広かった。30畳も有ろうかと思われるリビングルームは光沢麗しきラワンの板の間。素足にヒンヤリ気持好い。ベッドルームはそのリビングルームをはさんで2部屋あった。そして各々にバスルームがついている。キッチンルームは一つ。

——ずい分広い部屋だなア。寝る所が2つもあるじゃないか。ベッドもダブルで。こりゃーいいぞ。さて、噂に聞くアヤさんだが、どうやって雇うのかな。できれば若いピチピチギャルで、住込みがいいぞ。何故かって？ウッヒッヒ。知らないよ……。

そんな独り言をつぶやきながら旅装を解いていると——。

「ハロー、ミスター。」と中年男性の声。振り向けば中年男性と中年女性がニコニコ笑いながら立っている。

(まさかノまさかまさかノあの脇の……)

「このアパートの管理を任されている者です。よろしく。この女がこの部屋付の掃除人です。一ヶ月700バーツ(約7000円)ね。食事を作らせるンならもう少し高くなるけど……。」と中年男性。

(やはりノ)

と叫ぶ内なる声はグッと飲み込み精一杯の落ち着きと笑みすら見せて、

「Oh, サンキュー。じゃアそうする。掃除と洗濯だけ頼む。食事はいいよ。」と私。

何だか訳の分からぬうちにアヤさんが決まってしまった。——面白くも何ともないな。

朝が来た。昨日のアヤさんが昨日の様に、中年の顔をしてやって来た。私は起きぬけで、まだ裸。何も着けていない。恰度、バスルームへ行き掛けの処にやって来たのだ。

「Oh, ミスター。ご免ご免。でもイイ身体してるねエ！」としげしげ見つめ入る。

「そーかい。サンキュー。柔道のお蔭さ。」と私も別段そのまま歩きながら応じたものだ。

トングという名のその中年アヤさんは、昨日の管理人の妹で、同居しているという。管理人一家はアパートの隅の一室を与えられ、裏手の方に住んでいた。

アヤさんトングは両手に箒を持ち、まるで二刀流の如く巧みに捌きながら各部屋を掃くのだった。私はその光景をただ見つめていた。

日本流に言えば、家政婦か——。

私にとっての初体験。家政婦なんて雇ったことがない。今、目の前でタイのその家政婦サンが働いている。

私は何とも奇妙な面持ちになっていた。世間話の一つもしたいのだ。しかし言葉が通じない。彼女はタイ語しか話さない。こちらはタイ語、まるで駄目だし。

シーン。沈黙の中にジャッシュと箒の音。時々向こうとこっちで顔を見合わせばお互いニヤッと笑うだけ。そしてまたシーン。

そのうち、

——何だか、掃除して貰っちゃって悪いなア。何かあげようかなア……。

などという気持ちにおそわれてきた。そしてタイ語をやらないと駄目だね、こりゃーとも。

かくして私はアヤさんトングなる女性を
雇い、バンコク暮らしのスタートをきるこ
とになったのだが、或る日二人のタイ人女
性を同じアパートの敷地内で見掛けること
となる。一人はまさに明眸皓齒。一人はそ

の肌浅黒きまさに食べ頃のお色気権化。

聞けば共にここで働くアヤさんと言うで
はないか……！

——つづく——